

# 青春

**台産 仙名**

**新・変質映画**  
ネオ・ベロセケケムピー

美少女  
なのっ

ベロセケケ  
なのっ

VS

美少女  
なのっ

仙台直送美少女シネマ

ゴールデンパートナーズカンパニー  
マイナーファクトリー  
第一回  
東京上映会  
“よりよい明日のために”

22日 26日

22日 26日

立ったまま眠れ 新作

女高生 有希子の日記 新作

吊首姦太郎 新作

池袋東口文芸地階(03)971-9423

B 文芸座ル・ピリエ



## 女高生 有希子の日記

85分12分 P.F.F.S.入選 ゴールデンパートナーズカンパニー作品  
監督 常本琢招  
主演 高橋由起 たかはしゆき

思春期の女の子なら誰でも経験のある、放課後の心ときめいたあの一瞬を機妙にすくいとり、描いた作品。全篇ワンカット撮影のなか、女高生役の由起ちゃんの頑張りが光る。



## じょしこう 騎兵隊だっ

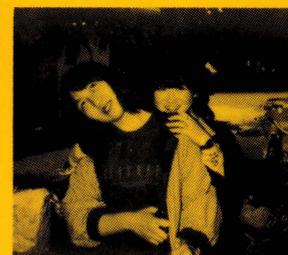
新作 87分90分 ゴールデンパートナーズカンパニー作品  
監督 常本琢招  
主演 富岡浩美 とあわひろみ  
菅原恵美子 すがわらえぞ  
鈴木久美子 すずきくみこ

常本の最新作にして「女子高生三部作」の完結篇。女子校ものから始まってあれよと言う間に別のジャンルに変化していく展開の良し加減さは、ほとんど香港映画だ。主演の富岡浩美ちゃんク!

## にっぽにーずがーる

84分60分 P.F.F.S.入選 ゴールデンパートナーズカンパニー作品  
監督 常本琢招 つねもとたくあき  
主演 中森裕美 なかもひろみ  
桜井順子 さくらいじゅんこ  
原田摂子 はらだせつこ

常本琢招21歳の処女作。仙台の街を三人の女の子が物凄いスピードで疾走するいまどきの珍道中映画。明快な混乱を指向する常本の資質が早くも開花している。



## 吊首姦太郎 の青春

84分30分 P.F.F.S.入選 マイナーファクトリー作品  
監督 クマガイコウキ  
主演 栗原千波 くりはらちほ

クマガイコウキが、従来の「私」映画「路線からの脱出を自論んで製作。少年と少女の純愛物語が繊細な映像と音楽とで三倍過かせる作品に仕上がった。仙台最初の8ミリ映画の古典。



## 立ったまま眠れ

新作 88分10分 マイナーファクトリー作品  
監督 クマガイコウキ  
主演 高野真倫 たかのまり  
関川広樹 せきかわひろき

或る女の波乱に富んだ生涯を、簡単に描いた大河ドラマである。クマガイコウキ構想3年の野心情。



女高生 有希子の日記	48分	1:35~2:20	5:50~6:35
にっぽにーずがーる	60分	2:25~3:25	6:40~7:40
立ったまま眠れ	40分	11:15~11:55	3:30~4:10
じょしこう騎兵隊だっ	90分	12:00~1:30	4:15~5:45
			7:55~8:35

【舞台あいさつ 7:45~7:55】

22日 26日

前売 ¥800 当日 ¥1,000

前売券は文芸座しねがていっくチケットぴあにて取扱。

主催 文芸座ル・ピリエ 池袋東口文芸地階(03)971-9423

池袋東口文芸地階(03)971-9423

B 文芸座ル・ピリエ

ごあいさつ



だがまた、これらの作品は全て仙台市で作られたのである。JR東日本東北新幹線で仙台駅下車、標高88メートルの眺望、星の降る露天風呂、基地の町仙台。クマガイコウキくまがいこうき常本琢招くもくもとたくま

ピカピカなの、ピカピカなの、ピカピカでしょ。こんな歌(徳丸純子「PICA PICA」)誰も知らない。誰も知らないこんな歌をエンディング・タイトルに流して、常本琢招は平然として「にっぽにーず・ボー」を終わらせる。この歌が気に入った。誰でも、気に入る。この歌が気に入るのは「にっぽにーず・ボー」の女の子たちがいいからだ。ピンクのパンツをはいて、坂道で踊りだすと、懐かしい映画が匂ってきて、誰でも、気が楽になる。女の子たちはみんな、懐しい映画を連れて、常本琢招の画面に帰ってきた。「じょしこう騎兵隊だ」の女の子たちも、映画の春休みを連れて、川を渡ってやってきた。女の子たちはみんな、自分が映画であることを知らない。そのまぶしいズレを、常本琢招は追いかける。追いかけることは映画を探すと同時に、ほんとうに追いかけることは映画を探しているだろうか。なにかを追いかえるすれば映画を探すことになる、と信じているだけじゃないだろうか。追いつけないズレのまぶしさを、常本琢招の画面は、はっきりと自覚する。ピカピカなの、ピカピカでしょ、と歌う声はほんとうは映画の音なのだ。この歌をくちずさめば、懐しい「映画」がそこそこに光りだすだろう。

だ。また、これらの作品は全て仙台市で作られたのである。JR東日本東北新幹線で仙台駅下車、標高88メートルの眺望、星の降る露天風呂、基地の町仙台。クマガイコウキくまがいこうき常本琢招くもくもとたくま



ピカピカなの、ピカピカでしょ。こんな歌(徳丸純子「PICA PICA」)誰も知らない。誰も知らないこんな歌をエンディング・タイトルに流して、常本琢招は平然として「にっぽにーず・ボー」を終わらせる。この歌が気に入った。誰でも、気に入る。この歌が気に入るのは「にっぽにーず・ボー」の女の子たちがいいからだ。ピンクのパンツをはいて、坂道で踊りだすと、懐かしい映画が匂ってきて、誰でも、気が楽になる。女の子たちはみんな、懐しい映画を連れて、常本琢招の画面に帰ってきた。「じょしこう騎兵隊だ」の女の子たちも、映画の春休みを連れて、川を渡ってやってきた。女の子たちはみんな、自分が映画であることを知らない。そのまぶしいズレを、常本琢招は追いかける。追いかけることは映画を探すと同時に、ほんとうに追いかけることは映画を探しているだろうか。なにかを追いかえるすれば映画を探すことになる、と信じているだけじゃないだろうか。追いつけないズレのまぶしさを、常本琢招の画面は、はっきりと自覚する。ピカピカなの、ピカピカでしょ、と歌う声はほんとうは映画の音なのだ。この歌をくちずさめば、懐しい「映画」がそこそこに光りだすだろう。

女子高生たちはなぜ走る 暉峻創三 てるはるかろう

ぴあフィルム・フェスティバル'85に「にっぽにーず・ボー」で入選し、全国自主映画界にその名を轟かせた映画作家、常本琢招を紹介されたのは、鎮西尚一監督を通してであった。

鎮西尚一と聞いて何もピンと来ない人は、自らの映画的感性が現在と果てしなく遊離してしまっている事を、深く恥じてしかるべきだろう。

いつかつロマンポルノ最晩期作品群のなかでもひととき光輝く傑作「コリター・エクスタシー」肉あさり(∞)で世の注目を集め、現在、新作「ホテトル天使 恥辱の罫(∞)」が待機中の新人、鎮西尚一は、こうしてジャンルから登場する有望な才能が、けっして黒沢清や周防正行で尽きってしまったわけではないことを、高らかに宣言している。

そしてその新作「ホテトル天使 恥辱の罫」で、監督の片腕として俳優演出から美術、はては出演まで、八面六臂の活躍をし、作品の畸型性を更に肥大

化させた人物こそが、当の常本琢招なのである。「にっぽにーず・ボー」

「女高生 有紀子の日記」「じょしこう騎兵隊だ」と続くいわゆる女子高生三部作は、一言でいって、ただただ映画のみを過激に愛してしまっただけで、よって撮られたにちがいない、と誰をも納得させる力に満ちあふれている。ここには確かに女子高生が抱える青春期特有の悩みが語られていないわけでもない。あるいはまた

た、女子高生同志の友情とはどれほどにまで深いものなのか、といったテーマが語られていないわけでもないだろう。

しかし、それを超えて、他ならぬ作者自身の、映画へと向けられた常軌を逸した信仰ではないだろうか。ここでの女子高生たちは、場所を速く移動するべく走っているのではなく、ひたすら映画へと信仰を体現すべく走っているのだ。

8ミリはいちばん小さな映画のフォーマットだけれども、8ミリ映画は、撮ることができない大きな映画の敗北のヴァージョンではない。そのことを、ぼくたちはいまこそよく知らなければならぬ。

いからしみきおクマガイコウキを語る

ワタシがやりたかったことを、この人はやっている

少女がアレコレするのを撮ったり、足にカメラを結わえつけて歩かせたり、出演者とケンカしてしまったり、「ハイだの もう一回だの 今のヨカットだの言ったり、ベニヤ板のようなアイデアを考えたり、山のような思い込みをしたり、海のような欲求不満があったり、霞のような満足感があったり、楽器は弾くは、歌は唄うは、テープに入れるは、フィルムを切った貼ったするは、酒は飲むし、笑ったり、ムツとしたりもするが、歩けるし、走れるし、言わないけどヒトを好きになったりもできるわけじゃないか。全部ワタシがやりたかったことだ。

その時、 仙台、 美少女は正しく疾走し、 淑女は正しく苦悩した。



もちろんそれ以前にも各大学内でのサークルや一般人たちの中で、8ミリ好き者にもクローリを撮っている者はいた。だが仙台における8ミリ製作活動が首都圏の3・ア・アップされるきっかけになったのは、1985年、PFF'85において、入選作品14本のうち2本を仙台8ミリが占める暴拳が達成されて以来である。その後作者たち二人はそれぞれ違った三年ぶりの東京における本格的な上映無駄な有意味なものであったかを報の機会となる。この三年間が、無駄な有意味なものであったかを報の機会となる。この三年間が、無駄な有意味なものであったかを報の機会となる。



少女の肉体の運動 少女の肉体の運動 少女の肉体の運動

仙台8ミリ 2人の男と

1960年代初頭までのスイス、1980年代初頭までの宮城県仙台市にも、映画は根づいていなかった。この場合の映画というのは自主製作活動における映画のこと、自主上映について、の活動を中心に、かたは、地元の映画情報紙「きーの」なりバラエティーに富んだプログラムが組まれていた。そして、この裏表わずか一頁の月刊情報紙に關係し、その自主上映活動を通して映画の魅力が教えられた数名の映画凶者たちの8ミリ・カメラか、こけしとカマボコササニシキの国宮城県に、真に映画が誕生することになる。まるで60年代初頭のパリにおいてと同じように、一映画紙を通して実作活動が興隆してきたのである。

少女の肉体の運動 少女の肉体の運動 少女の肉体の運動

